

外来種

を知る

ワスレナグサも外来種



野菜として持ち込まれたもの



河川敷のタンポポ畑。セイヨウタンポポ

外来種とは、もともと日本の自然の中にはなかった生き物のことです。その中で、日本の風土が適して、いつの間にか野生化したものも多くあります。(⇒ 在来種)

農産物のほとんどは外来種です。毎日食べる米ももともと日本の自然にはありません。

セイヨウタンポポももとは野菜として持ち込まれたという説があります。19世紀後半に、札幌農学校（今の北大）のアメリカ人教師がサラダの材料として栽培したということです。生は少し苦いですが、アク抜きして食べてみませんか？



セイヨウタンポポ。花下の総苞片(そうほうへん)がそりかえる



エゾタンポポ(在来種)。総苞(そうほう)がささくれず丸い



オランダガラシ(別名クレソン)は明治時代、軽井沢などの外国人居留地が始まりだという

牧草として持ち込まれたもの

牛や馬の餌となる牧草も、外国から持ち込まれました。これらは牧草としての他に、土を盛って道路や堤防を作った時に、斜面が崩れないようにするためにも利用されています。



シロツメクサ。牧草名はホワイトクローバー



カモガヤ。牧草名はオーチャードグラス



オオアワガエリ。牧草名はチモシー



アカツメクサ(ムラサキツメクサ)。牧草名はレッドクローバー

✂ 園芸や観賞用として持ち込まれたもの ✂



ヤエザキオオハンゴンソウ。
別名ハナガサギク（花笠菊）

人の目を楽しませるために持ち込まれたものが野生化しました。元々あった在来種に比べて、派手な感じのするものも多いようです。



オオハンゴンソウ。ヤエザキオオハンゴンソウのもと。これも外来種



もともと日本にあったハンゴンソウ



ヒメジョオン。別名、柳葉姫菊



オオアワダチソウ



ムシトリナデシコ

✂ 外来種は悪者？ ✂



オオアワダチソウの群落。他の植物を排除し自分だけになる。最後は自滅するという

外来種が野生化するということは、その分昔からあった草の育つ場所が減ることになります。では、外来種が悪いのでしょうか。

確かに中にはオオアワダチソウのように他の植物を枯らす性質のものもあります。（最後は自分も枯れるといえます）

しかし、エゾタンポポが減った原因はセイヨウタンポポのせいではなく、育つ環境が減ったからだといわれています。

私たちが毎日食べる農産物は、もとをたどればほとんど外国産のものです。また、自然を変えてきたのも、私たちが暮らしやすくするためです。

場合によっては外来種を取り去ることも必要かも知れませんが、しかし、その外来種がそこにある意味はよく考えてみなくてはなりません。

参考文献

「日本のタンポポとセイヨウタンポポ」 小川潔 どうぶつ社 2001
 「北海道帰化植物便覧」 五十嵐博 北海道野生植物研究所 2001
 「原色日本帰化植物図鑑」 長田武正 保育社 1976
 「名前といわれ 野の草花図鑑 1～5」 杉村昇 偕成社 1985-1992
 「図説花と樹の大事典」 木村陽二郎 監修 植物文化研究会・雅麗 編集 柏書房 1996

「改訂版 牧野新日本植物圖鑑」 牧野富太郎 北隆館 1989
 「北海道植物図譜」 滝田謙讓 自費出版 2001
 「日本の野生植物 草本Ⅰ～Ⅲ」 佐竹義輔・大井次三郎 他 平凡社 1981, 1982
 「新版 北海道の花(増補版)」 鮫島惇一郎・辻達一・梅沢俊 北海道大学図書刊行会 1993